



〈植栽したトチュウ〉

「トチュウ」とはどんな木か

最近漢方薬ブームを反映して、薬草木の栽培が盛んに行われているが、その中で「甘茶づる」と並んで新聞紙上等をにぎわしているものに「トチュウ」がある。

1. 「トチュウ」の天然分布

「トチュウ」は「トチュウ科」に属する落葉高木で、原産地は中国大陸中西部、雌雄異株であり雌木の混交率は低い。(漢字で「杜仲」と書く)

2. 日本における栽培の沿革

文献によると平安時代から貴族階級間で強壮剤として用いられたという記録があるが、これは、「ニシキギ科」の「マサキ」を「和杜仲」と称して用いていたようである。

本物の「トチュウ」は、大正7年(1918年)に導入したと一般にいわれているが、中国の文献では明治32年(1899年)との記録もあり定かでない。

当初の植栽目的は、温帯植物唯一のグツタペルカ(電気絶縁性物質)資源樹として導入されたが当時の植栽木はほとんど見当らない。現在は生薬として葉・樹皮の生産を目的として栽培されている。

3. 「トチュウ」の成分と薬効

「トチュウ」は血圧降下、強壮、肝機能向上、鎮痛などの薬効があるといわれている。

葉及び樹皮の成分は表-1・2のとおりであるが、血圧降下にはピノレジノール・ジグルコサイドが、強壮にはアルカロイドやビタミン類、肝機能の向上にはカフェイン・アルカロイド、鎮痛にはタンニン・アルカロイドが有効といわれている。

「トチュウ」にはそれらの成分が多量に含まれ、

薬用人参以上ともいわれている。

4. 現在の栽培状況

全国的には岩手県田野畑村で植栽されている約13haの記録がある。これは養命酒が苗木を養成し樹皮の生産を目的として栽培させているもので、樹齢は7～8年生のようである。また、成木としては群馬県松井田町の前橋営林署所管小根山試験地の約0.1haがあり、樹齢約45年生である。

県内の栽培は、昭和55年頃から「杜仲茶」の原

料として、葉の生産を目的とした栽培が上伊那郡箕輪町を中心に行われており、栽培面積は約44haに及んでいる。(表-3参照)

当所においては、昭和57年から薬用植物の試験種目に「トチュウ」を選び、前記の小根山試験地展示林で種子を採取し、播種育苗技術ならびに、山地植栽における適応性について検討している。

参考文献 堀口佳哉 杜仲秘健康法

経営部 篠原

表-1 杜仲(葉)の成分結果

	成分名	含量	測定法
1	灰分	8.14%	局方、生薬試験法
2	グッタペルカ	0.65%	化学便覧応用編、ゴム類似天然物、ガタパーチャ
3	エーテル抽出物	4.68%	食品成分試験法、脂質、粗脂肪
4	全窒素	2.17%	食品成分試験法、窒素化合物、総窒素
5	可溶性固形分	26.10%	局方、生薬試験法
6	タンニン	1.26%	食品分析ハンドブック、嗜好品および嗜好飲料
7	総ビタミンC	52.18mg%	飲食物試験法、ビタミンC
8	還元型ビタミンC	32.11mg%	〃
9	ペクチン	6.61%	食品分析ハンドブック、食品成分の分析 ペクチンの定量(カルシウムペクチートとして)

(長野県衛生公害研究所)

表-2 樹皮の成分 (養命酒資料)

○樹脂	7%	○樹脂
○グッタペルカ	2~6.5%	
○その他	}	ピノレジノール——血圧降下作用確認
		メジオレシノール
		ペタイン
		β-フィトステロール
		クロロデニックアシッド

樹皮の水エキスを動物実験、臨床実験の結果、血圧降下作用があることが認められている。(ピノレジノール)

他の成分の作用は不明

表-3 県内のトチュウ栽培状況

(農政部資料)

地域	栽培面積	生産量	市 町 村
上伊那	3,980 a	9,130kg	駒ヶ根市、南箕輪村、箕輪町、伊那市、高遠町 長谷村、辰野町、飯島町、宮田村、中川村
諏訪	310	750	原村、富士見町
松 筑	50	120	坂井村
長 野	20	50	信州新町
計	4,360	10,050	